

あるべし、黒を用たるは毒あり、白を用たるは毒なしと、世にはいへれど、大かた石灰を用て制する故、白と見ゆるも毒あり、病者人しれず害を被るなり、

〔俗耳鼓吹〕江戸の人、一日に黒砂糖百六十樽を嘗るといふ、是は新川大島にいふ家の藏より付出す故、大敷しれ侍る也、杭州の人、日に三十丈の摺小木をくふといひしも同日の談なるべし、

〔驚流狂言記 二十三〕附子

主 是は此隣の者で御座る、召仕ふ者共を呼出て申付くる事が御座る、太郎冠者居るかやい、シテ  
はあ主 次郎冠者をもよべ、シテ 畏て御座る、○中 主 汝等を呼出すは別の事でもない、某は去方  
へ遊山に行程に、兩人の者共は能う留守をせい、二人 畏て御座る、主 夫に付て汝等に預る物が有  
る程に夫に待て、二人 はあ主 やい、是を汝等に預る程に、よう番をせい、シテ してあれは何で  
御座ります、主 あれはぶすじやよ、○中 あれはぶすといふて、人の身に大毒の物で、あの方から  
吹風に當つても、忽めつきやくする程に、構へて側へ寄らぬ様にして、能う番をせい、○中 シテ 夫  
なればよふおりやる、儲某はあのおすを見て置ふと思ふ、○中 アト 何と見さしました、シテ 某  
は白うどんみりと見ておりやる、二 耶 身共は鼠色にどんみりと見ておりやる、シテ 扱某はあ  
ぶすを少ト食ふて、見度ふ成つておりやる、○中 二 耶 是は如何な事、たつた今にめつきやく致  
すで御座らふ、扱も、にが、敷事で御座る、シテ さあたまらぬは、二 耶 やい何とぞたぞ  
く、シテ 氣遣ひをさしますな、うもふてたまらぬ、二 耶 何じやうもふてたまらぬ、シテ 中々二  
耶 ぞて何じやぞ、シテ 砂糖でおりやる、二 耶 やあ、砂糖じや、シテ 中々二 耶 どれ、某もねぶ  
つて見やう、シテ わごりよもなめて見さしませ、二 耶 實と是は砂糖でおりやる、頼だ人にだま  
られておりやる、シテ いやのふ、其方獨りなめす共、こちへおこさしませ、○中 主 是は如何  
な事、某の戻つたと聞たならば、其儘飛んでも出さうな物じやがさめ、となくは何事じやぞ